

シンポジウム／口承文芸研究のこれから

思想としての口承文芸研究

― 関敬吾先生を巡って ―

野村 純 一

『口承文芸研究のこれから』

思想としての口承文芸研究（要旨メモ）

発表者 野村 純 一

○学会発足時の理念と目的

- 一、 切迫するグローバル리즘への対応と視野。
- 一、 国文学、日本文学研究は何故閉塞感を招いたか。
- 一、 柳田國男の昔話研究と関敬吾。
- 一、 「郷土研究」「家郷の学問」の限界。
- 一、 「生活者の昔話研究」と「研究者の昔話研究」。
- 一、 消滅、衰退する地域言語と一方、併せて通底する話群。
- 一、 識字率と口承文芸。
- 一、 口承文芸研究は、はたして落日の運命か。
- 一、 サブカルチャーからメインカルチャーへの転機。

お手元に配布の「要旨メモ」に沿って話を致します。それにしても、最初の発言者の私には、本学会出立時を回顧して、当時の事務局担当者の一人として、何か参考になる材料を提供して欲しいとする要請がありました。伊藤清司先生のご徳憑かと伺いました。差し出がましいことは存じますが、以下、申し述べたいと思います。

もともと当学会成立の事情に向けましては機関誌「口承文芸研究」第一号の「彙報」に「口承文芸学会の創立」として、白田甚五郎先生が経緯を詳細に記しておいでです。学会の「公式記録」としての記事です。たゞ、こうした「記録」とは別に「記録以前」とか「記憶」といった条の存するものも、これまで紛れもない事実であります。ここでは「公式記録」には見えない伏流とか、あるいはそこに至るまでの、雰囲気や環境、いわば「記録」以前の「記憶」を少々述べてみます。それと言いますのも、何事によらず物事は不意に現出するということはまずありません。それにはやはり、相応の手筈が整えられていたり、また準備が為されていたりしなければなりません。ましてや学会の設立、発足ともなれば、これには当然相当期間の用意とそれにさきがけての構想、ならびに意見の調整といった作業が必要です。一方ではまたそれへの気運の醸成というか、いかなれば気分を促進するといったわけで、それこそ「記録以前」の「前史」とも称し得る場面です。

振り返ってみますとかの時機は、それまでのフィールド調査

にもとづいて採集された各地の昔話が、ようやく陽の目を見始め、伴って一つの理念のもとに上梓されるときを迎えています。これをいま、端的に示すなら三弥井書店で言挙げをした「昔話研究資料叢書」（一九六八年四月）がそうです。稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃四氏の名のもとに、同書の「刊行に際して」には、

口承の昔話を研究し、民族、人類の共有の文化財とする——この願いは、近代に至って、各国、各民族にいちじるしく高まり、また着々と実現されている。しかし、わが国の現状を顧みると、多くの先学のすぐれた業績を持ちながらも、新しい調査研究の必要がいつそう切実に感じられる。

いうまでもなく、現代まで伝えられたわが国の昔話は、文字の文化によらない私どもの祖先の、かけがえのないことばにほかならない。しかるに、その貴重な昔話の伝承は、ほとんどいまの語り手をもって絶えようとしている。この叢書の課題は、かかる事態を迎えた日本の昔話を、確実な学術資料としてとらえ、あわせてその研究の現段階を示すことにある。と、そこでの主張を実に明白に訴えていた。この意思表示は、昔話の研究史の上、位置付けて高く評価されなければならないと思っております。何故ならば、ここでの言質には見る限り、企画はそもそもが版元主導の営利事業ではなく、しかもこの出版に際しては四人の編集委員がそれぞれ対等の立場から個々の意見を寄せ合うといった姿勢が確実に読み取れるからです。

少なくともここには従来とかく弊害を伴うところの企画立案、執筆者の選定、そしてそれを意図的に運用する出版社の存在といった学界（会）文法を越える意向が窺えるからにほかなりません。そしてこの好ましい雰囲気は、やがて日本口承文藝学会の中核に持ち込まれ、それはそれですでに一つの思想の胚芽となつて、今日にまで及んでいると、判断し得るからです。

もつとも、いま申し述べましたこの種の動きは、胎動してすでに存在していました。たとえばその前年の九月に國學院大学説話研究会は白田甚五郎監修シリーズの第一回「津軽百話」（東出版、後、桜楓社）を刊行しており、翌二月には石川純一郎「河童火やろう」（同上）、次いで六月には野村の「笛吹き髯——最上の昔話」（同上）を出しているからです。他方、白田甚五郎・関敬吾・野村純一・三谷栄一を責任編集とする『全国昔話資料集成』の第一回配本、佐藤義則「羽前小国昔話」が岩崎美術社から上梓されました。ということは、これの刊行準備に寄せて、二、三年來、関敬吾、白田甚五郎のお二人は重ねて膝して相談する機会が多く、伴つてそこには当然、学会創設の話題があつたからです。その際、学問研究の傾向からして関からは常にグローバリズムへの対応と視野が求められ、これに向けて白田からは一九七四年六月、ヘルシンキで開催された第六回国際口承文芸研究会議参加の経験にもとづく、大いなる賛意が開陳されてきました。このことについては同会議席上意見を同じくした韓国の崔仁鶴の文言がこれを積極的に裏付けています。参考ま

で白田甚五郎、崔仁鶴編『東北アジア民族説話の比較研究』（一九七八年、桜楓社）所収「東北アジア口承文藝シンポジウムの経過について」所収の一節を引いておきます。

その後、わたしはたびたび先生にお目にかかれたが、先生は口承文芸を民俗学や国文学などの一分野でなく、独立した口承文芸学として発展させるべきだという念願をお持ちしていらつしやることがわかった。そのためにも昔話をはじめ伝説、神話、民謡など研究者らはお互いの意見を尊重し、資料を提供しあい、まとまった研究が進められるような雰囲気が好きというまでもなかった。一方これと合わせて、異民族間の比較研究も至急を要する課題であった。

こうして参りますと、全体的に事はいかにも淡淡と伸展したかの印象に陥りますが、それはあくまでも現在という時点から回顧しての、いわば一種の「解説」に過ぎません。さきほど「この種の動きは、胎動」していたと説きました。しかしそこで忘れてならないのは、先行して早くに大学の研究会やサークルが各地に展開していた昔話採集調査の動きと、その結果を報ずる孔版、あるいはタイプ版の資料集の存在です。またその位置付けです。ただしここではこれらを指摘するにとどめてさきに進みます。これは他に機会を求めて改めて触れます。ただ、そうした研究会やサークルで活躍したそこの学生諸君が、いまはこの学会の主軸を担うひとびとになっているという、この事実はお互いにきちんと認識しておきたい。この一事は当学会が

他の学会（界）文法とは著しく異なる大きな特色の一つであるとしても間違ひありません。その他、任意の市民グループや民話愛好者の参加もそうです。具体的には民話と文学の会、日本民話の会等々です。ここにいま雑誌「民話と文学」第二号（一九七七年十一月）があります。そこに次の記事があります。

関敬吾先生はインタビュー直後、東京都芝白金の東大附属病院に再入院なさいました。お身体の具合を考え、御了解を得て校閲をいただかず、編集部で原稿をまとめました。なお、関先生は前号にて紹介いたしました『日本の昔話——比較研究序説——』（日本放送出版協会）により第十六回柳田賞を受賞されました。

また、今年の五月には「日本口承文芸学会」初代会長に選ばれました。この会は「日本および諸外国の口承文芸ならびに口承文芸に関連するものの調査・資料収集・研究を促進し、研究者間の交流をはかることを目的」にし、事務局は、東京都渋谷区東四一―二八国学院大学文学第五（白田教授）研究室に置かれています。——編集部——

ここには関の『日本の昔話——比較研究序説——』が、第十六回柳田國男賞受賞を報じています。関が『日本昔話集成』全六巻を刊行するに際して、柳田がそれへの共篇を持ち掛け、関がこれを断わつたとする経緯につきましては、学会誌第十四号「関敬吾博士追悼特集」の「座談会」で触れています。ご参照下さい。

次、「要旨メモ」の第二に「国文学、日本文学研究は何故閉塞感を招いたか」は、振り翳^{かざ}していかにも大仰な表現です。たゞしここまで述べてきた文脈に沿ってすれば、それはやはりあまりにも従前の「学会(界) 文法」に身を寄せ過ぎた。要はラジカルな発想にもとづく、新たな思想を獲得するにはなはだ臆病であつたからだと括つてもよいかと思います。更に言えば、伝統的な和歌の世界を尊重する「国学」の呪縛から解放され難かつたとしても差し支えないかと判断します。いまに引き続き国文学、国文学者の辛さです。したがいまして、というよりはむしろ、ですから今後はこの「辛さ」をどう「強味」に持ち直して克服して行くか。これこそが国文学研究の正念場になる筈だと、私は考えます。重要な課題です。

それはさて置き、「メモ」に沿ひまして話を更に進めます。これには先頃、仙台の佐々木徳夫氏の昔話集に寄せた「生活者の昔話研究」が、現在の私の考えを率直に述べております。恐縮ですがそれをちよつと引いておきます。次の如くです。

ここでは、まだいまひとつうまく言えませんが、しかし、それを承知の上で仮りに次のような言葉で済ませておきます。まあまあから思っているのですが、わが国における昔話の研究史を窺うに、そこにはどうやら地元「生活者の昔話研究」と、他方「研究者の昔話研究」とが、平行して大きく在り続けてきたような気がしてならない。もう少し丁寧^{ていねい}にこれを言えば、在地「生活者としての昔話研究」と、在外「研究者としての昔話研究」

とも見做し得ましようか。そうかと言つて、後者を安易に書齋派^{しやさい}などと捉えるつもりは私にはまったくありません。地方図書館探索、資料発掘は立派なフィールド・ワークの一つだと認識するからです。ただし、ここではその事は措きまして、ひとまず先きの案件に話を戻せば、たとえこれが在地「生活者の昔話研究」であろうと、在外「研究者の昔話研究」であろうとも、共に昔話を研究する意味合においては、変わるところはほとんどありません。しかるにいったん振り返るに、実際にはこの両者間にはかなり大きな隔たりがあつたと考えます。お互い懸隔^{けんかく}があつたのではなかつたか。それを思うにつけても、従前の昔話研究を思うに、この点の論議がまったくなされず、歴史的にも等閑^{なわびり}にされてきたとみるのは、はたして私一人の思い過ぎでしょうか。

それというのも、その頃——とは、取りも直さず私共若い頃の話ですが、東北の地には民俗学の一環としての昔話研究にかかわつて、優れた先人たちが各地に輩出していらした。たとえば^{さくはく}湖北の弘前では齋藤正。小井川潤次郎。そして岩手の小笠原謙吉、藤原貞次郎、菊池勇、田中喜多美、能田多代子、佐藤良裕。秋田の武藤鉄城。山形では戸川安章、清野久雄、佐藤陸三。福島では岩崎敏夫、山本明。新潟には小林存、渡辺行一、水沢謙一、佐久間惇一。佐渡の山本修之助といった方々がそうです。文字通り綺羅、星の如くに名を連ねていらした。ただし、こうした先学たちの成果は、顧みて関するに、一見してそこには自

ずと共通項とも見取れる傾きがありました。

その第一は、各自があたかもその分を守るかのようにして、相互にそれぞれ居住の地、あるいはその周辺の地の調査と報告に始終していたとする事実です。これは位置付けてひとえに民俗学を「故郷の学問」「家郷の学」とする思潮が紛れもなくそこにあった。「郷土研究」です。日本民俗学発足時の基本理念だとしてよい。事由はもちろん、そこでの推進者、指導者であった柳田國男の思想です。したがって、というべきでしょうか、それとも当然の帰結とすべきでしょうか、地方在住のこうした先人たちの調査、報告の指標はすべて柳田の発意と意向に直接添うものであり、またそれへの意に叶うようになされてきました。結果として、それらはそれぞれが土地土地からの資料提供、もしくは調査報告としての性格が著しく強く、当事者たちの個性、主張は抑制され、あるいは封印されていたと評してよい。こうした情況は客観的にも、雑誌「旅と伝説」、そしてまたそれに続く「昔話研究」誌上への採択、未採択を知られば、事は歴然としていて疑う余地はすでにありません。

こうした結果、地方在住の「生活者の昔話研究」は、時間と共にやがて一種の袋小路に立ち至るようになる。つまりは、互いにそれぞれが分を守る、併せて隣人の調査範囲を無理には侵さないといった、いわば暗黙の不文律のもとに大所高所からの比較照合といった観点を欠き、遂には視野狭窄といった弊に陥ったからにはかなりませぬ。「生活者の昔話研究」の限界で

あり、閉塞であったと認められます。

この事に危機感を抱いたのは、いうまでもなく関敬吾とその学問でありました。グローバルな視野からの比較研究がそうです。ただし、こうした関の志ははたしていつ何故から来たものか。この点になると、関自身は一言もこれについて述べていません。そこで本日は、この事に向けて私なりの見解を披露し、参考までにその事実を披瀝したいと思います。キー・ワードを握るのは意外にもインド文学研究の、否、インド学とすべきでしょうか、田中於菟彌氏です。

名前を申し上げると、ここにご出席の方々は東洋文庫『鸚鵡七十話——インド風流譚』（一九六三年、平凡社）、あるいは『パUNCHャントラ・五巻の書』（上村勝彦共訳、アジアの民話十二、一九六五年、大日本絵画）や『インドの笑話』（坂田貞二共訳、一九六八年、春秋社）等を想起されることかと存じます。本学会発足時からの会員でいらつしやいました。その田中於菟彌氏です。関先生とは戦前からのお付き合いがあり、学問研究の上では絶対に欠かせない友人であるということです。学問の歴史から溯って考えれば、ある時期、民間説話はすべからくインドを起源とするといった、いわばインド単一発生説とも称すべき思潮がありました。それを考慮すべきかもしれません。しかしそれはともかくも、関・田中の交流は正直言って意想外でした。いつから、どうして？ といった感慨です。ちなみに関先生は一八九九年（明治三十二年生）、田中氏は一九〇三年（明

治三十六年生)です。

私事にわたります。一九八八年(昭和六十三年)、勤務校から在外研究の機会を与えられて、私はインドのネルー大学に赴くことになりました。テーマは「民間説話ならびに叙事詩の比較研究」です。関先生の元に報告にあがりますと言下に「直ぐ田中君の処に行き給え、電話を入れておくから」といわれました。紹介をいただいで、早速幡ヶ谷に伺いました。商店街の通りに面したお宅でした。玄関を入ると左手、応接間風の部屋のベッドに臥しておいででした。しかるに、ひとたびインドの事になると次から次へと話題は沸騰して尽きません。二時間が三時間に及び、ようやくお疲れのみえる頃、尋ねるべき大学のプロフィールを一人一人に紹介状を書いて下さいました。デリー大学、カルカッタ大学、そしてタゴールの創設したサンチ・ニキタの大学等です。その上で「国文学専攻の人がインドに行くようになったか。私は思いもなかった」と言われ、握手をして送っていただきました。田中氏は一九八九年(平成元年)七月十二日、八十六才で逝去されました。世に「一期一会」といいます。私にとりましては文字通りのかけがえのない一日でありました。

さて、田中於菟彌氏の事績に向けましては雑誌「東洋の思想と宗教」第七号に「略年譜」「著作目録」が収載されて、その全容は明らかになります。本会会員坂田貞二氏のご苦勞もありません。これにもとづいて推察すれば、関、田中の交流はおそ

く一九三八年(昭和十三年)の頃からではないでしょうか。田中氏はその年の二月から東京大学助手として文学部に勤務され、大学の図書館に頻繁に出入りされるようになったからです。一方の関先生は、いうまでもなく、柳田國男先生のご徳澤によってそこに通い詰めていたからにほかなりません。以後、お二人は携えて終世学問研究の道を歩まれることになるわけです。ただし、右の指摘はあくまでも私の推量でありまして、詳しくは次の世代のかた々々の調査を俟ちます。それには現在、群馬県邑楽郡千代田町赤岩の光恩寺こと、長柄行光氏の処に田中於菟彌氏の資料が一括保管されていることを申し添えて、この件を終りたく存じます。

以上、ながながと勝手ばかり申し述べました。残りの条はすでに他に書いた内容とも重なりますので、本日はこれをもって終ります。

(のむら・じゅんいち／國學院大学名誉教授)